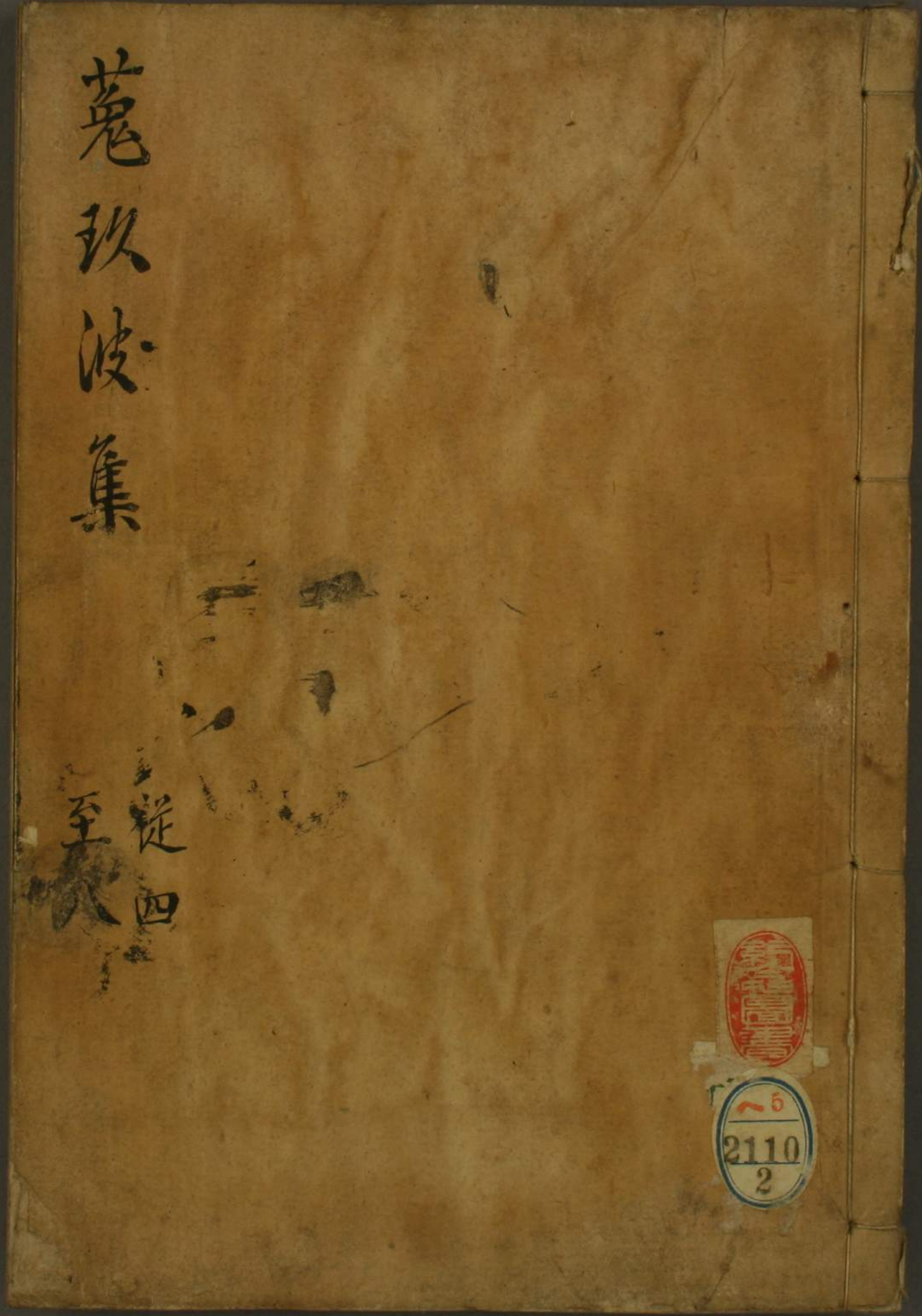
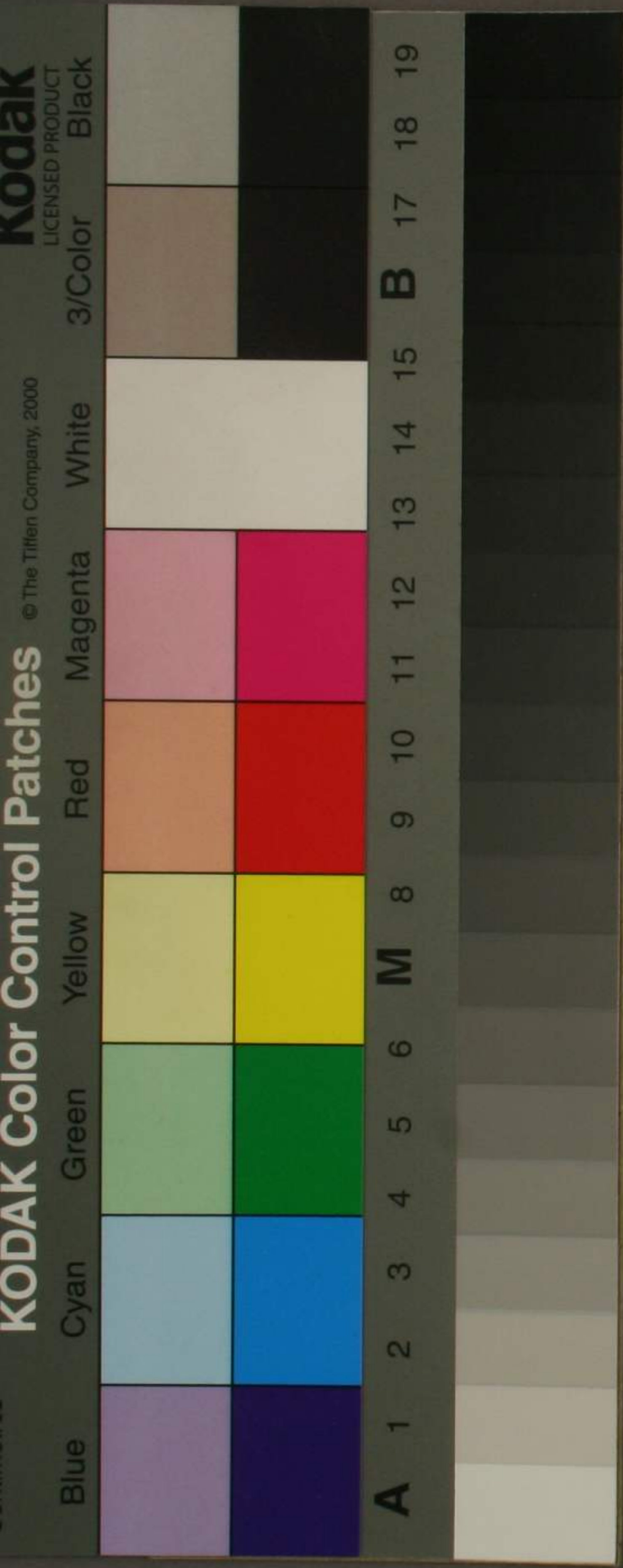




門利5
雅2110
卷2



秋波集卷第四
秋連歌上

文和三年七月七夕

神子ニテオホク初ハオホク

今上御製

以クを秋成海萩乃風

秋のまきしやくき身あはるん

関白前左大臣



倉持氏印

萩乃吾松の夢小て風をたふし

貞和三年六月萩原殿百韻

うまの夢方々もあはれこの夢

花園院御製

秋乃心の神秋夕はゆ

三日月もおをまうとかけ又く

二子法親王

き、秋あふふに夢あけも秋をさ

おろしとふもいふとをさふ

秋海を

秋いそぐ風をさつりて吹く

尾花、未をさる小娘く

前々細き氏

袖もきく夕秋をさる小て

木のはしと水の音きこふこ

久良親王

秋小を脆い涙神ろはる

今更ふ其名もはるく成ふ

後深州院辨内侍

軒 4 けり依草の葉の露

ふあのはけり風りふこ

前々納言貞季

七夕はあふきもの夕けり

きりやこりも物思ふへき

信實朝臣

海邊小波ふきもるぬ天の河

元享三年十月霜以殿万韻

連歌小

きりきりきりきりあふせも

後宇多院御製

と朝ときりきりきりも銀漢

やふき楊りかけきりきり

前々納言家

く玉新おる海月乃あき新河
きく初秋をうう新室

夢室園師

曉姫も明海室をやがし世晩
三葉ふ四葉ふの一夜のふ叶

性道法師

星合のふふ七の日記りき
秋ふちし我心がこふ道

寂濟法師

七夕もこふいあふき新つき待を
も移き世老の命ををり

源親光

風ふき新乃柳乃葉あふる
かしの涙のちををふ井

良阿法師

玉れをかき新一葉あき新風ふ

野をゆくあまをほく露おきそ

前右卿右大臣

夕日くもをき 松の秋風

身の上憂ふやぞ知るん

関白前左大臣

かけ秋菴を山に秋うせ

文和五年三月家の平句平

何もの乱に毛いそぬひし時

導手巻法沙

秋を夕暮風を萩乃葉

月を枕するぬ夜

歌阿をし

風中かき婦に庭の萩を

秋風や揺る高岡を

菅原高秀

庭を萩をこころにをる

あさちとついで花咲ぬ

救済法沙

お御ききりふと秋ふ

笛能きりこも秋調を又と

二品法親王

藤乃秋も松を秋婦く

前大僧正賢俊

中垣の阿ふふ秋乃未ふ

志ふふふ秋乃

前中納言

ふふふ野もせの秋乃

う法親王秋を

山階入道左大臣

風ふふをの阿ふふ秋乃

いふ麻の音阿ふふ

関白左大臣

物にぬるかふーきうふや秋る著
来乃戸かきハ月乃明反

今上御製

夕のきし山秋とこもひ
月影も取あふきかりん家

左近中将義詮

木とくくもかふ江乃秋
月出ぬきき次戸のうう船

雲晴く山くちとふふり

月もくく秋きき夕著

権少僧都永運

秋きく上くと柳山くく

けあ乃戸かき秋のし風

新嘉法所

かきくき秋のくくも夕く
風くきくくは秋きくあき

糸 いと ち

朝魚乃華をあきもとむ

貞和四年六有家の連歌

多一時乃秋乃夕

左多岡智直義

朝うかの志かき家華と夜も

かなるも物やうも結ゆ

前古多岡智直義

小野のあきちふかけは朝 白 露

むあゆき夜、神のち

権律師定選

おち多散家風のち叶夜し

夜小やぬらあふあ夜衣

相何清阿

松風の音を思ふ秋小

文和四年五と雲ふ秋のち句
中歌

身をふもに毛い捨て世の中とて

権少僧部永運

秋ろき知を秋にやまを
い後くふあを夜がしらしこ

性道がし

兼崎いひた草とともふし

秋のちきり我袖のふぢれ

良尋法師

あふ婦くちかしの風をきもふし

ともふぬ野邊の鶴のまはる

左近中将経家

八江のをとふちうらの浪

前矢義宗平

あはれ山のかげ乃板をさし

あはれ板間を月もかくまに

中細忠嗣

かたきくたふ秋の色を

後多の院御製

風小穀の野空の千種ふ花のほ

後多の院御時重なりてはる

なとちあ穀りふ夕ふはる

西園寺道前左政大臣

若のちふ園の味垣あはる

くるとあくと詠もあはる

若中御空

水山満空はる川霧

穀るや招もりあはる

善阿法師

秋もも甘きあはる山

牛らとあを早ふ馬、あ

須學法師

あはるかくひあはる

月の影をふあはさきの空

大江成種

うちやまや小野の秋風聞く

月ふに影をふあはさきの空

道守 峯法師

如くはさきか秋ふあはさきの空

婦あき枕ふ月ものこまき

左近中将義詮

うは夢やむくは秋ふあはさきの空

うは夢やむくは秋ふあはさきの空

福光園入道 前関白
太大臣

うは夢やむくは秋ふあはさきの空

うは夢やむくは秋ふあはさきの空

うは夢やむくは秋ふあはさきの空

後多羽院御製

叶ふ行やとのひくは秋ふあはさきの空

叶ふ行やとのひくは秋ふあはさきの空

小萩原めく霞けき夕暮

従三位家隆

鹿ろうをきけりやうめん
争一をきけりやうめん

救済法

中ふさふ集え車乃野小出

松を啼きうに風の意海

大内や集の萩の戸新ちるる

かゝ人新立舞神やまゝらん

後光明院
前関白
太大臣

尾花と似てはあを海乃浪

寛治元年八月十五日仙洞連歌

山里を人の便をかりて

後深州院少将内侍

新らけもあけい新らけい風と雲

前大納言為家

さ〜ぬ〜千 秘きえりあふ秋のふ
あけも〜と〜も 袖は〜ふは

祝部行親

杉千枝ふお美あけ下のきあき
山のちを松乃下 ち

関白太大臣

水あきき月もりけふやふは晩
関は夕乃あ〜〜 帰く〜

殺湊が〜

一木あは杉千さ〜ぬ月清
夕乃ゆ〜秋や新〜ん

道守墨法沙

月出は山を山じりて程遠
鹿のふた狩場の道の山々

二子法親王

か〜と〜と月を入もか〜し

いと初まがれむるる室

源頼朝臣

祢覽るる月おちせまるむいさ
多々身あそむかせ

源頼朝臣

月はらも山のたくまゝさか
舟をさへこれ男なり

源頼氏

望み月の新月のうけ
いさゝか寝たけりおの夢を

源高秀

月も身小しむ秋のせりぬ
へうさかぬぬる夕方

源高秀

山おくらまも月をへきふ
行あきとむ家あつても

月夜きやうしとあまをゆけふ

谷水き苔の下る流るる

権少僧部長驗

月の行とるやふにせしき

夕光憂を秋に先くは

周阿法師

新く山に露出る月にかし

神々しきあはれをうけ

二不法師

月の夜を夢をうけし

浪婦きつた浦の秋を

権ちぬま夏

月みも汐ひをうけし

弘安二年はるり吉社人とな

納のひをうけし

いほもくもぬきたる

法印室意

玉^かけ^たた^る秋の月

浪も秋ふれ^るあか風を^も吹

源信詮

月小^き我^がう^らも漆も^いと^はな^る

楓の^のひ^ろ葉^は波^はの^の穀^はの^のこ

権少僧部親祐

今宵も月の入江小舟と^もな^る

雲を^をく^くは^は杉^はの^の下^はり^け

三阿法師

山小^き雪^はも^もと^と来^はる^る月も^も子^はか^はく^く

大室新^は光^はふ^ふと^と雪^はの^のこ^こ

藤^はち^ち細^は言^は室^は家^は

袖^はに^に花^はい^いく^く月小^き成^はぬ^は花^は

さ^はひ^はー^ーさ^はも^も新^はや^はあ^はの^のあ^はん

後多利院御製

去り山峯よりそとて行月并

後多羽院小重親より中々

鈴虫乃ちうきとてしる急雨小

後二位家澄

月出まゝ小峯より来る

西和四年五月伏見院石顔の

事記小

本陰よりかゝるの親より御依

伏見院御製

月まじかゝる夕やみり我ら

寛治元年八月十五夜中記小

里姑名も何うかあつき何うそと

山階入道左大臣

月小より海へ浅くふりやを

花やうし波を心もなるきり

山階重成

月子や水の秋いりもく人
あゝぬ間もふと一筋の恨みん

道生法所

杉の枝ふき月小まを来法

寛治二年三月花の下より

お路の白さを霜と我思法

糸思法所

久々のとちあり衣手子

おちしきまへに聞かぬの音

善何法所

新拂ふ花子とのかけ分と

夕日新野おちせくおねもあし

素何法所

いづれもあがく月夜の夜を待と

秋のちもいれあふふあふふ

菅原長綱朝臣

いけや月の頃をもよあふらん

こあへもかけも松の秋らせ

道 笑ふ法阿

いけや月の夕々しめらん

わもいけや秋の光る

二 弘法 親王

いけや月も二ツ時ありき

まきの高きいけや秋の光る

関白 藤原 大 臣

いけや月も二ツ時ありき

菟玖波集卷第五

種連歌下

霧ろくくへもろく秋を

歌大納言氏

松原秋木間小月乃あらりけ

かきくさむしや秋をを

導峯法師

山乃く月秋こきくまきく

泉あきき松風を

救海法師

住く秋くらの南小月を

ちかきめくおる中垣

性道法師

只の秋末に秋風小月を

夏よりくきくや増ぬ

歌阿法師

月結いつ秋ろ夕々終

秋小冬かき依紫の戸秋

ふ秋意法外

山けきやう依月をおくこ

而きふ山少きやの秋をき

二弘法親王

月をもあゝぬ紫戸秋うち

秋ちる人の花秋夕か

後二位家僧

月を待も山のかけ秋多き水手

君代を秋きふあきふ新依を

前右衛門督お散

月小かき依秋をり秋へ

六条門大臣禪林寺の家少き連歌

秋小

月秋かきや市小出覧

中納言相

在明乃月かけは海ありき川

秋さむく成海をるのるを庵

南仏法師

い祢るそ秋月おしく夜を明きん

二うひ物秋にもいあうな

系阿上人

村やをいは海月のきり入る

程せききやうに軒をさしあきん

寂海法師

とこさきう入窓る月あけ

あきうひとふふ公きく免に

道尊法師

紫杉戸の月い木間ふ影分て

一明あ海山のむきうひ

関白前左大臣

曉乃さやし新市未月夜さ

何をのさ新世ふすひん

花園院御製

さあ、ちね身の水さうは、月

捨々身小物もの人いさうし

花大納言さ氏

山乃かく小も月世あさぬ

何なるこさ、新枝の上風

二品法親王

新も小さ月小公やうさ晩

紫のさや新枝のむきめ

能矢之儀孝良

月あさひ明くも夜をや新さあ晩

婦さぬあおさ新もあさる

救瀬法師

主もなき浦の捨舟月のせさ

清き月ありきや扇あけし

木然法師

月照る朝小祇社の戸を照らす
やもめあけ身は衣は清き

順覚法師

秋寒き月夜が月の色なり
たもふ公望身は清き

増二位行家

入る月を人もさるる月なり
板間あけきよき月なり

最上僧正

清き月ありきや扇あけし
七加暦四年の裡の七夕

夕日淋しき風

後光明院
左大臣

くまの月ありきや扇あけし

清き月ありきや扇あけし

木然清沙

月照る朝小祓の戸を照らす
やもめあけ身衣を清く

順覚清沙

秋寒き月夜があの色なり

たもふ公身小あけ

増二位家隆

入る月を人もさうあけし

板間あけあやうきあけ

最方僧正賢俊

あけあけ月もきこえあけ

嘉暦四年内裡の七夕連歌

夕日淋しくあけ風

後光明院 左大臣

あけあけ晴る山を月く

二品法親王北野社千句千

降ろけし海に山乃急而

導養法師

くきやうけいふ波月千ちあふん

婦一のけけ烟やうきふあふん

底阿上人

月けぢうふあふんきやう

きやうふあふんあふんあふん

藤原宗經

きやうけけ月けにきやうあふん

いき関初ね初ふ乃あふん

小槻重實

山崎にきやう月もきやう井小けきやう

権少佐初永運

かきと云いきやうけあふん

法里けむふの圖あふんあふん

公法くー皇奥い乃あき

権少修約快宗

披ひちち市の手ねとなましくん
お路乃もぬや岩か成くん

神直資

下々き檜原の上小月又へ
身をちあきぬ神乃上お

勝原高喬

月あえいあかけもあは菴おと
おあはくふ秋風おふく

勝原資能

くら大さき山小月の先おと
お小冬年をくむは河をみ

十佛法師

水くおと月つあ月おあは
二弘法親王お路社午句お路小

くきしをいふに我風をいふ道
導 卷 法 師

空を月山といふをいふ道
あまの秋の秋をいふ道

并 意 法 師

月をいふ夜といふ道
少 夕 著 意 何をいふ道

源 成 賢 朝 臣

月をいふ夜といふ道
幾 行 我 ち ち 秋 師 の 聲 意

源 孝 直

月をいふ夜といふ道
招 せ 秋 意 意 ち の 秋 意

海 意 意 意

月 秋 意 意 意 山 意 意 意
十 といふ 三 秋 意 意 意 山

前中納言左近

秋乃名小春ふ長と秋月

末の秋ニ夢い祢ふふ秋

常曉法師

獨あ海人乃ふ冬ふ夜もかじ

月小春ふふ里秋通路

法眼良澄

祢ふ冬ふや人も砧をいふく晩

ひさく白ふ冬ふ草乃花

後光明院前関白
太大臣

春いさくあ田秋ふふ秋あけ

ふか行鳥小春ふふふ

右近中納言義詮

門田乃秋ハタからふ事

花く梅あきふふふ

関白前太大臣

鶴乃こくまあ、ちの秋をきこる

曆應四年春日新卯未宇治

遷せりまひし帰坐あはれをい

聞、一頃救済を一家の台顔

まかり

宇治の秋をきこる

性道なり

春日野乃月子や鹿の帰る人

書ふ鹿乃ちのこきあは

後久我大政大臣

山田もたは、祢の床の林、ま

る、ひ、婦は小夜をこきま

前中納言と忠

ひ、ま、あ、田、み、菴、の、ま、り、頃

小田をまは菴もつるあまの

最方納言と氏

福等々、凡、能、婦、め、り、あ、は

月も空里の余波に夢あり

上勝原賀歌

松一本秋の風如く浅きり

人々連歌をきしははり

契りなき一離の味も埋ま

後多和院御製

弘安二年八月七日唐申連歌小

なりあつて霞あきけふ秋風

後嵯峨院御製

己ら身ひとほそ麻衣かくあは

る是に秋なり秋小かやまらん

二和法親王

風吹くくむすかりは麻衣の音

木なり霞小草花命は

権僧正良輔

空城跡、秋小鹿がく夕々

月出ながらや小毛まき

大弼玄氏忠

鹿こひろ鹿の音聞も夕々

文和三年六之家始いつく

かしく小秋乃心とくき物を

関白左大臣

山空里小毛鹿や鳴く人

夕露乃しあひみぬ稲穂

藤原倫篤

小田守庵や袖細く晩

秋まのし行時多秋うせ

大江成種

むくや始さく免ぬ月小唇

七加曆四年七月建卯年

後光明天院
前関白
太大臣

神牛のあはれを秋のふくむと伝ふ

後醍醐院御製

宇津乃山を越え抱乃包をのり

くくひなき夕を秋にあはれ物を

今上御製

抱乃あはれを阿さち帰乃あはれ

見ふくわあああ乃あはれ

左近中将義詮

曉乃あはれを後毛夜にあはれ

衣小あはれを涙にくはれ

道寺実法沙

行乃あはれを秋にあはれを

あはれを秋にあはれを

権少僧都永運

色蕉夢乃あはれを秋にあはれを

志免一々原小帰法州

殺瀬法師

草押乃秋の山路小里小夢乞
二不法親王家七万額重親小
乞く海車 夢世中小里

周阿法師

落推乃ミヤ手がき能小藤原
夢能秋とや 別き瀬是

勝原信勝

紫能石の夜寒能時多山小風
吾手もくら能色やたらん
二不法親王

小落山の紅葉能音た能手

月手うあ草の紅葉の端は

前中細とる光

夜能たぐむしやちるをあらん
ちく小夢虫の名をもかゝる

殺海法師

山々秋あり秋去のや小機後と

くら秋秋ニき夕かきと

勝原助夏

あき人きあき小碓をうらあき

くら秋思ひき深草秋夜

道采言法師

あきもかく秋をうらきき秋夜やと

二秋秋あり秋の市きあき散果を

深ぬ時きやま小く残晩

小きの上小文字残らん

野何法師

山秋場のもきあきをうら秋の層

やとあき秋一ふあやま

惟宗親孝

松の葉いりし時ふたつし

や秋もくも寒き風な

渾永法師

紅葉散る秋の嵐のる秋あし

秋もあくさき修保の山風

完元法師

もろく教の松の市間月減る

野山秋秋の目し松のせ

勝原親長朝臣

や秋時る深き宿をさき物を

雨路をもくぬ風乃ふ早

素阿法師

いの葉えし秋の松の時ふし

時雨も葉えぬ秋の松原

勝原氏齊

かけのこ秋夕り秋の山を紅葉しと

夕日——新 嶺のむき

二品法親王

松原を所く 乃紅葉あそ
我心さびし 姉子深き

関白前左大臣

紅葉新山を 松原もか

露寒——まうやさし 狩衣

六條門大臣

市木新 花枝 紅葉あはれに

雪おき 乃や海や 匂が秋人

校海法師

かま——るる 草薙秋と木あそ

あそ—— 海々を 庭の朝露

夢窓国師

くら 枝々 草小を 結ふ 露もふじ

をこち 子きく 是 櫻秋の風

善阿法師

かましく小雅ま川虫の思ひ草

文和四年五ノ家の午句年

月をさしそいをさすしと

関白前左大臣

ニ禮也此時多秋乃寒き山

紅葉の落ちぬ山をせぬ

糸直法師

昂らぬき市下露る時多

西平行と習然とを掲る

蓮智法師

系多しけぬ秋をさくたふ

や間おきと多いつくまぬ

源頼氏

行ともさぬ秋をさぬ

尾善のうへを紅葉あり

神
少
経
冬
秋
久
水
あ
お
新
国
あ
と
殺
海
法
河

菟玖波集卷第六
冬連歌

か
さ
ぬ
ま
か
な
新
冬
の
白
菊

最中納言家

初
一
冬
晴
く
り
新
も
芳
き
と
あ
あ
新
川
あ
新
水
移
ぬ
衣

後嵯峨院御製

時
り
と
ソ
ひ
ら
ふ
と
時
も
新
晴
ぬ
き
年

うき新行ふ心も

最方納言女氏

時ふに泣けりきふり

さひくみさひれ松の風

花園院御製

けふふに月も曇りし

なほ雪けりもさふ空か

最方納言女氏

時ふに尾上新五郎のそり

まゝおきけり小夜時ふり

福光園院
前関白
左大臣

神無月四方新五郎の歌より後

うちつふりきりも泣けり

信實朝臣

本さあもいりきり

後宇多院御製

神々々々老の跡見も時多し

夕日4時頃より南にふき雲

左近中将義詮

落葉もまきふ下は村に礼

室古くは庭に花あり

寛胤法親王

山々々々秋の時の来る

杉の風もや月の晴れん

権大弼言良冬

志くまは後毛山にうきも

落葉も後毛は風の音

源高齊

冬枯の市末に松雪歌も

又や婦せやふ時の降る

素阿法師

さきいりて秋は母を思ふ

窓より清おとや嵐を知らん

舞臺清沙

明く二夜も木葉のふきし
夜に冬枯祓免様宜なり

岡何清沙

木葉を毛おとす
おは清沙のしりし

左近少将義成

傳へもせぬ風のしるき木葉のふきし

権方細言実夏

木葉散り嵐千山道くし

ふきし時を知らず成りし

上勝原親也朝臣

木葉ふきしを知らず嵐を知らず

上勝原高秀

片山のふきし木葉のふきし

とーうきこぬそとむかもあま

高世重成

在明乃月と後乃む時る

さゝるあき世小ぬう神うち

安部宗時

月小成亦うきやれむ時る

指乃霞れお清家の草

耶美言清沙

心風やまはのしとれを結あし

指さるる小き冬うれあし

膳原道直朝臣

木葉の風とて歌いさる

かくれいさやあき方のうさし

善阿知し

衣多をぬるあき風のうさし

紅葉のれをぬるあき河上

長何なり

やうはすやゆをたむる
りを重しや実をさる

大中臣國親

山里の落葉ふたふたをさる

とくもさかひのふたふたをさる

藤方細言ぬ家

白妙乃をたふさきの古果を

もたふさるるたふさるる身

道朝法沙

あかきききききききききき

きききききききききききき

藤方細言ぬ家

木小をく霜をたふさるる身

いく秋ききききききききき

後宇為院御製

十の松のうもゑのち
友もなきおを摩小埋まを

道二位お燈

抄小ゆきまをお朝一も

室古をふお神やふおは

前中細言お家

言能後夢も見えぬるお前

おとおあるる夜やまぬん

後嵯峨院御製

青あまお水もおねや結ひおる

岩まお細きおかきおき

前中細言お氏

かお田平おまおけおるもあし

河波まおかお山もおる

二お清親王

水とおまおのお上おまおき

雪止ぬるをささるの波

導 兼 法 師

夕ひるを流る川に雪 氷

おのゝけ風小鴨を鳴くは

救 海 法 師

月の志く氷小 露やかきぬ

うちとけき後なる雪を

順 覺 法 師

水多しけしるに水

うたふき 水古新き小 新雪

源 島 朝

霜夜にききの月平にき

雪 水 雪 雪 雪 雪 雪 雪

平 兼 貞

水鳥に水乃ひきききき

水きき 浪の音ききき

新中納言
弘

水
く
く
へ
ろ
き
ー
ち
松
の
せ

くきふのやまに帰家らむ

信照法師

今欲浪乃訂于
祭寺法之記水

いづれに逢ふ事ぞ
かたじけなく

蘇子言為家

解き氷の下に
とあるは
氷

後多和院平車公家惠和

あきくけふけふ

華中細言家

い
あ
い
の
袖
や
も
流
月
さ
へ
さ

同
一
惠
昭
年

不
其
霜
や
い
と
所
ら
し

琴弓 如家 芦間 の 水 け ぬ う へ

後多の院小なる家事歌の中
志々も物いさし里を悲候て

前中納言家

かききか友千とらふ

終夜沖津吹風甚け終て

後醍醐院御製

き祢さめぬ友ちかきとれ
波のあゝぬらね白雲

二品法親王

おきくハ跡こぢの三途濱千鳥
風如冥ききかを松の陰

大江成種

枯野小いあふき草花さき
庭小降ふあゝきききき

木結法沙

きききききききききききき

ふもき、雲が白き夕ぐれ

信明法師

冬草や三法師一法を結ぶ
那がまの野や道狭く

素阿法師

草を枯れし雲が白き夕ぐれ
ふもきもかすむ

勝原智春

根さへ草に花をさす夕ぐれ
かゝるもの多し

道寸良言法師

雲が白き夕ぐれ
秋の草をさす夕ぐれ

前大僧正道玄

草の原をさす夕ぐれ
かゝるもの多し

西園寺入道前太政大臣

お殿うはらふのかはるる夕々しき

里日けお時ふおをゆたふお

権少僧部永運

ゆふ降るあふふおの初雪

りふおふあひさふおぬら山風ふ

林阿清少

時雨一重ハ巖ろきく雪

常陸清少

おれのうちおふもふつふお降る

夕お風ふいおく山人

赤方細言ぬ氏

おふふ時ふいふまの雪ふふ

さむくおふ風の風をいふ

道生清少

初雪降るぬこーお山ニ元

冬はつゝ言ふ風は秋に似て

善阿法師

時をいつまきながらむく雪

二所法親王少野社子句のまじり

ふふあふふ寒き夜もほとふふ

救海法師

初雪をふきながらむく雪

契りもさききふふあふふ

冬議宗平

初雪をふきながらむく雪

か山をふきながらむく雪

従二位宗隆

山をふきながらむく雪

松風も山と里とわが山

関白最左大臣

時をいつまきながらむく雪

窓より清風を山のまじり風

前より細く如氏

白きのをは屋上の雪も似る

庭のふち小きくを御茶

前より細く雪後

山里や雪を海へ下りて如人

よりやまへ下りて如人

源高宣朝臣

明より清風を山のまじり風

舟出に雪川上如人

源高宣朝臣

よりやまへ下りて如人

庭のふち小きくを御茶

源高宣朝臣

雪がたきくまの下の如人

かきくまの下の如人

道生法師

ふふ 然るるるる 雪は如き法
いつたまふふふふ こと 然るるるるき

新 忍法師

神 然るる 心野 雪 然る 跡 法 け
むく 雪の けま 依山の 道と 雪

南 佛 法 師

峯 然る けま けま 雪 おま 雪の 雪

柿 然る 里 雪 多 然る 心 け

源 宗 氏

降 おま 法 松 も いさ け 雪 け 雪

消 け 雪 あ け 雪 け 雪 け 雪

如 法 雪 雪 け 雪 け 雪 け 雪 け

み け 雪 の け 雪 け 雪 け 雪 け

西園寺入道前左衛門

如 雪 け 雪 け 雪 け 雪 け 雪 け

今更あまふまや帰らんよー新山

後醍醐院御製

行ききつめ 雪乃ぬ海の中

女をむく帰る家小雪のうらさき

在原業平朝臣

雪がお霜をなくやかくあや

あふるおのゝいゝおひてまし

年終り小杉の春をまゝまゐる家

後醍醐院御製

かたき家雪をみちりまゐる

いふあぬる帰るを風の下あは

関白前左大臣

雪ふる家此をみちりまゐる

友御新の家小野乃山陰

源頼業朝臣

雪ふる家雪をみちりまゐる

夕 跡 千 々 浪 乃 々 舟

救 濟 法 師

水 少 家 川 跡 お も 々 小 舌 々 々 々
佛 と 思 ひ だ の も ま 川 菩 牙

権 少 僧 初 永 運

月 出 小 乃 乃 巖 乃 々 々 舌

山 跡 一 一 時 多 小 野 迹 不 又 降 々

乃 阿 法 師

乃 々 夜 の 舌 々 々 々 々 々

々 々 乃 乃 々 々 々 々 々 々 々 々

十 仏 法 師

舌 折 小 常 跡 々 々 々 々 々 々 々

白 々 の 多 々 小 々 山 迹 三 一 々 々

二 不 法 親 王

入 々 々 一 々 舌 迹 夜 乃 月

道 迹 一 乃 々 々 々 々 々 々 々 々

さ〜ぬふ山の深小亭降りる

跡より 峯やうはむーら香

丹波守長

山人の所本然うーら香ぬる

さ〜ぬ小亭あき冬の室か

後深州院辯口侍

本かーのぬるぬおさへ袖さえる

罪ろむくひをさうもあなむ

救済法沙

月おろかろ場ろ香のねちけ

文和五年三月家の午句まね

狩場の雛子のおのうかく

道巻法沙

かゝ山の香け白香ふふあを

文和四年十二月の昭野社午句

こまろ車ねちけへらり

性道法師

岩やきけ小野の山法師の如しと
け花のきけつものまゝと

信照法師

冬にも月あけ窓の梅元

菟玖波集卷第七

神祇連歌

建久五年夏新頃安樂寺破損し

修りし程にも修造の沙汰なり

被ちたまひりりる人の夢小束帯し

る人のけりりりるのまひり

あまけ御戸はくまもくしあまき

其後まゝ一人の取司通夜し

室を色なりくのまひり

世にこれこそ君のあはれなり

此の句字府とて奏聞し侍りて是の
年頃ハ家のさうさう侍りて家を初
め公家とて彼を造営せらる侍りと
平兼盛駿河國司と侍りて富士の
明神とていふは

高き社とてを建ててこもるは
こそふつけく尸は

平兼盛

いすゑとあるはくたわぬこは

あやしく和僧とていふは
侍りて家を建て

今新田野も大内とて侍る

関白左大臣

はくしとて神代の都とまりて

神とて是のちふなりとて

前右衛門右衛門

小の里とて君初とて字はとて

小こ里ふき世も今とこ世しき

今上御製

いりふあいつかきくきこめを
君々行幸はるぬ道く

左近中将義詮

こ世やはかきといふは世まふ

北野社千句書

あくちかか家人のあま

二品法親王

は神のいつちもなきかけおめ

関白家乃千句書

夜中く乃夢のまきき

殺海法師

神々き月と梅と袖ふき

名を聞もふおき紐のふ

六條田大臣

日かけあはるゝ新社のらけ
是を以て上るゝふはるゝ思ひ

導言法沙

神小いあひ君乃あゝまみ
二の法の席小あひもせさる

権少僧部永運

我新あゝゝあ常原乃神
導言家の万顔要録中

一夜のゝゝ神々新秋

性道法沙

ニ神や此ハ幡まゝるゝ天の河
子矢新ゝゝ今もゝ一せは

法眼 がみ

源乃がれも清きいゝ水
是野ゝゝ近き神々

素阿法沙

白妙の志免野力きくの道をと

元享三年四月乙未山内の方頼通

かたの里も近きと云

前中細と忠

神まははるもあふ花草と信

前中細と経

りけきくは加茂のふく

関乃戸のふはけり公せ

後嵯峨院御製

神まははるは御後まはに

くらもあふき悦ひも

関白前左大臣

らあふふ北野の神の共むし

まふけの夫とあふき

二品法親王

神代よりあつ初むは国け

住す一神浦あり海人の波の音

前ち細言氏忠

跡をうけし一をさき神乃代

家の千句神中

一夏神山のまけこのまゝ

前ち細言氏

かも乃まはるこい卯さなりはり

清ふまゝを神官をもあふむ

導筆法抄

神新祭り多か茂の上ま

国のちるゑい神の代のま

救済法抄

機本もお新い垣もあお古

七新や一物を様々のむ

小規安宣

り吉とるもぬ神のまちり

七流の道も今世おさまる

法印弘全

此國を多かり吉能神ありと
國まじりる家をも弼をき

祝部行親

いく世おぬ家の社あり

ある山をいふて三斗にもり
頭万額まきぬ
祈りのりあるやかきぬ

大中臣祐貞

と衣とそ神もいそせ能定こも里
人こふか茂と八幡乃神まふ

丹波良尚

いのふ公あゝぬいともな
兵言能言能あは志望のね

権律師空通

かーまゝとる日吉能神も取ま

安んぢや七の社平運廻る

本然法沙

羊毛申毛目——神新日

伊勢を新せ新因とて我きけ

卜部兼前

神風や重治と安法磯乃室

かゝ如く川の片に男とて

海部宗信

伊勢のくち内外に神と歌まて

名ふるかくまぬいせとて聞け

若木田経直

神風や音様うきいあゝ川

此御代に生れあひを法とて

中臣正朝

氏子を穿ぬ神や此々み

二親ふたゝまを誦し誦とて

勝原親秀

神を仏にぬきあはれみ
十返新招の本末をわたり

西園寺入道前太政大臣

多えに物に任吉乃神

けさーも此は小野の山人

最中知言室家

千早振りのものゝあはれの道のつら

人の心新り心をあらうまな

救済法師

まきあふむ役の長新りはまを

二つにあらまき新り

上り新か茂の川原の室をら

今りもり吉とききりききき

二品法親王

諸人の心なり神むる

いつともいふ言はふとくき

糸魚法師

神がまに北野の雪小跡竹さ

祝子うさかー染の袖うさ

信教法師

いふぬ心もくさや知らん

伏見の里小ぬまは白雲

上勝系信務

跡うまー神のむしー能常原や

な衣神うさかー雪の中

常盤井 入道前
太政大臣

かーーさかひく加茂の神りき

きー能あさか様をまむへき

前ち綱言ぬ氏

五十鈴川神代のもみくらん

ふもぬ御代をうさかま

ト新萬能系

リニ妙山柳小のけしまるみ
とらふ少きくらききう奈

教る法沙

名小島、宝井とぬ三筆山
とあり夜す少き祈あり一法

上勝原家卿

我頼むや一法の御名なりも かゝる

ちふふき一法祈ありをある

二品法親王

系山子足もあつむね神の国

親とも御法子とも名はた

関白前左大臣

宝居き一八幡平野の禰より

神のまに野守と誰、御あり

法寺墨法師

契をうくはあはれなりたる

ふふふふふふふふふふふふ

授済法沙

ふふふふふふふふふふふふ

神はいうきふ引馬もふり

性道法沙

ふふふふふふふふふふふふ

此神もちりふきふふふふふ

権少僧都法宗

日吉神宮居持ふふふふふ

女帝是ふふふふふふふ

良何法沙

未いのは初元ふふふふふ山

書はけふふふふふふふふ

上勝原俊顯朝臣

関城ふふ社小道は神ふふふ

旅のあはれいをも船小ともなり

救済法

ち佐小まに神のまををたしにめ
い由たのさやあ ち乃以反

前中細言

神代より面白きといふを
生ましも親母なりと聞法

関白前左大臣

名をききしに神乃宮も

舞妓重光

楊女重光

菟玖波集卷第八

釋教連歌

清水寺小通夜し侍る小瀬の音
を聞えり

和泉式部

と海おとあかなし瀬のしる系

とくそきくうき侍る小瀬小御帳の内
とくけしうき御色あき

大悲しや侍る侍るにせふくうけと

是を親言侍りせうきいふ侍とぞ

見ふ海めをかくる悲をみる者

あふとかないうこの海乃いかなしと

は句を保元の頃近江を離れし侍者
國中小かひあき美女あひくし
少海を国司きく波女を悲いふふた
けきりふた国司思ふあやあきとふめ
いふふとふ連歌をくみ入る
封をけくふ連歌をくみ入る
小なふかひいふは女くみ入る
一といひふた道の行衛もあき
思ふふたくし右山寺小こもくし
アけくふくしくし下向し侍時

大いなる一町をくゞりて行くや女人行あり
ては句を詠ふ公家かな佛の教ふべき
と思ひて国司の許へ行くや公家おこしと
りりりいりりと我が女をあやうきなり是ハ
親方の妻(ま)なりと我ハ泣くべし

鎌倉極樂寺の僧の夢の文珠の兄
多きいふ事なせん
いふとや作らふか
かゝるおせうな家
今か
つと
なん
も
な
る
や
二
人
に

思ふに外に
道もなし

式僧のつとめくまひ詠こころ空を憂ふ
たうとけなる僧三人はよく侍るや
詠家

あいまなりひくしる子淑くぬきと
は句をゆかりしとて誦しきりいふ一
人の僧のいふなり

西へ行へき人乃ぢきゐる

此事權中細言字彖々の記ふと

世の如く
 汝をく
 もちき
 と
 ち

大僧正實賢

元平や無明住地より一々来む
さうとて汝後世やうと暗如法

前大僧正家道

知れぬいつもあゝ家月が如く
いのち公衆上と中一も

二不法親王

三代子と法久一復の身もたぬ

か法を勝の如くおきては

称阿上人

むさき如くおむく人をまじの戸小

関白家千句重如

月寒くふらひきき友もを

救済法沙

野宇如くみのをくふ秋の夜

きうきかりくハ夢如二月

前々細言氏

己一 新山未法の花の穀しるし
新くふくあはれふ人のこゝろ

関白前左大臣

是やこ新くふくあはれ蓮新花のひも
仏乃あふくあはれあふくあはれ

二 弘法親王

一行道哉や星新照あらせ

星くふくあはれ新くふくあはれ

後多羽院御製

くきふあふくあはれあはれ

星新も神々あまき恵わく

権中細言公雄

衣新くふくあはれ新くふくあはれ

後多羽院新くあはれあはれ

新くあはれあはれあはれ

勝原秀能

まはるむき、此世のつゝをまゝにや
もとねあういゝ紫ねを

道 峯 法 師

人ねえ佛の公くきー
二月なりきゝる海を

救 海 法 師

ふをのゝに、露乃林ね木ハカ

龍ねえきゝる高き山を

二 品 法 親 王

木末より花嚴一く句い素を

身より公の持てまゐり

前 方 細 言 氏

おれあゝ小男かい法のさうりや
古寺のつゝえのき子夜ハ更に

権 少 僧 於 永 運

早き船の波をききしなり

法印龍海

心の目とあはれりしなり
つら法は夢をささるるも

之勝原信勝

人なりきまじひをつらふ心
法の道ふもあはれ

性道法師

大なる三井の心より流る

導きあふなり

あかひきききし難波浦舟

救海法師

世ふし御法のりめをき

仙を鏡を蓮の糸なり

赤方細言氏忠

一まをふしなり夏をつらめたりや

あいにうゝおのれ身をもあはれらん

権が僧が親祐

まきくはれあき法のこおのちを

まきくはれ人のこゝろをあらはせ

法眼良澄

跡をふたれあきうまむしうを

勢のいふや目をいへ入らせ

源
二勝 鍾

志うけ国やうは法のちをあらは

目の上まともあらはれせ

良阿法妙

将人のつゝおはるを思ひて

いやーきゝも親をやしう

順覺法妙

たあゝ金の手人とかう出せ

一枚いふふもたはれせ

信昭法師

あきまを清むつきの花さき
かきとつふは清めさるる

十仏清沙

寺ちきあまの如星の住み
九乃つこ如夢いきるなり

後新刻片

より清く如身の清や清き

後多の院の清くは清き歌の中
伊勢の如あまのよたの清き

源朝臣

清き心の清きひきさる人
さきとひきくは清のまかり

二子清親王

名も高き山の一の箱あき
かき如きさるるの野る清き

久良親王

おこちあつゝ仙の前のぬり法きか
ふかの峯おあり法きの月

関白前やうち

きつじん後の佛り世にをこ

弟子はくちうあ師とていこく

殺濟法沙

弥陀の在にいてかの前かあ取を

くちか新をき品をかこ家

鏡親上人

一色も十勢も同じくはる

ふ一勢平いふ家の新

立阿法沙

法り一色二新川ろ中の道

法生新ハ一勢ろち

本鏡法沙

かろ國も公ふあきききき
公のあききき國もな

影導法沙

聞得ききやき運もあききき

家お千白連歌

お夕のあききき身おききき

赤ち細言き氏

眾がききき世をききき

ぬき頼あやあききき

高世重成

後の世おきききあききき

十と二きききあききき

系おききき佛もあききき

法のおきききあききき

頼玄法沙

被るはのかけ行水おあききき

いふおこぢふはる浦の夕暮

源師氏

寺あまをまゝ入相るゝあ聞を
譬れ祈まゝのあふしあしや

常智法師

古寺あふあふあきと晴る夜ふ
法とむる事も一夏のうち

源親光

閑ふらいとたふつゝあふむと
夜や衣れ玉をゝあ晩

上勝原親光

晴乃月もあふ水とあふ

鳥野山むしの戸あふあふ

道兼法師

清子心あふさゝあふ

灯の光もあふあふ

二品法親王

法王、世ぬ法を日々に承あて
をくま先立行いかの國

救済法沙

あふも人の力法をさし舟
法をほうひのやまを結つ

文和二年十二月前古僧西賢後
三宝院よりこまをこまを結つ
此よりやがき世よりええ業まし

關白前左大臣

三好よりをつるこ一法
より法王もたふ法王の燈

上勝原後醍醐臣

書をけき法のことより見あじと

心小あうく世をいひはる

京月法沙

法の沙乃おしし道入初

おしきぬわし小身を毛拾法沙

用通法沙

あゝ水々ぬきいづりやけの神

むぢききあゝ小身を毛拾

高山上人

いさきふ心を月々かけしを

誰々おしききを毛拾

行何法沙

佛々おしききむふりちういあま

あましきき原々おしきき

文屋行おしき

其ちいふくおしきをうたの兒

うはるしきもいふあましき

津島法師

おきなき御法をうけ実を
さいしき市井中にもあむ心

源氏頼

う海に舟あききとゆきとあは道
心のるぬのりふに我あま

五膳原親為

うきものを離し後いささうとふ

かけういの海を此世後の世

母阿法師

二つあきしぬと西にありたう
かりぬうを法とて我きけ

称阿法師

波岸に送りむふ法船うきと
ぬちせの舟舟かりとての歌

照海法師

後の世いつふらそや夢あふ

らね 四年ふらそふのふ顔あふ

やあくらとけふはくら玉の夢

左々 潔 啓 直 義

いふらそあき 祐 夢といふえもせぬ

と 祐 夢

最 方 納 言 氏

まらひ ねえ けふらとふしき



